

郷土館発 其二 深山を訪れた人たち

今回は、前号で紹介した柳田國男と関わりのある津具の山崎家の二人を紹介します。

山崎家には、下津具の「なかんさ」と上津具の「かめや」があります。両家は親戚関係にあり、共に医業だけでなく地域の重要な役割を担っていました。

◎山崎讓平

豪農・医者・神官
一八二六～一八七八



山崎家日知録

『日知録』讓平個人の記録を書き記したもので、欠かすことなく記述されている。江戸末期の津具の人々の生活を知る上で重要な資料となるものである。写真には、安政三・四・六・七年とある。ペリー来航と同じころなので、今から百五十年以上前の人々の暮らしがわかる資料になる。

◎山崎珉平

医者他
一八六〇～一九三六

『山崎珉平昔談』から抜粋して紹介します。

万延元年 上津具村中町に生まれる 父 謙吾・母 可津
明治八年 近藤坦平の門に入り 西洋医学を学ぶ

明治十四年 内務省医師検定試験に合格する

明治十七年 東京麹町区富士見町に単独開業する 附近の矢

田部良吉郎へも往診 良吉の妹(従妹)くまと結婚す

明治十八年 母の強い希望で津具に帰る 自宅にて開業

明治十九年 事情により東京に戻る 矢田部邸に寄寓す

明治二十七年 津具に戻って開業 九月 日清戦争に赤十字救護班委員として従軍す

明治三十年 上下津具組合村長に任命される

明治三十八年 柳田國男が敏子を見舞うため津具を訪問

明治四十年 長女敏子没す

明治四十二年 上津具信用組合を設立 上津具村青年会を組織し会長となる

大正四年 上津具村字前油戸に結核治療を目的とする療養所『山嶽療院濟生館』を建てる

大正八年 上下津具村組合村長を命じられる

昭和四年 長男讓一結婚し中町の家を改築して医師開業

昭和十年 柳田國男が津具再訪

山崎珉平宅訪問

昭和十一年二月 没す 七十七才

柳田國男による『ささやかなる昔』に珉平の様子がわかる記述があります。(要約)

●明治三十八年 柳田國男が敏子を見舞った年、珉平は日露戦争で軍医として出征中

留守居の人が先生の逸話ばかりを聴かせて居た。それを聴いて自然に結ばれた肖像画は、きつい、思い切ったことをよくする人だが、

同時に正しい人で、殊に小さな貧しい者の味方であった。こわいけれども懐かしいというような印象を間接的に受けた。

●日露戦役後東京にて

山崎氏の眼には、(私國男のことを)まず概念の少壮官僚が映じたことであろう。だから其眼は相応に鋭く、議論も決して柔らかなことはなかった。これは行かんと欲して再会を約して別れた。

●二度目の対面 昭和十年

年は忘れたが先生に逢いに又とし子さんの墓を拜みに、前ぶれなしに上津具の村に入った。夏目一平君や後藤兵衛君が、色々を紹介してくれた。今は面長でいかり肩で、眼の光だけは依然として強い。山ほど話をして聴かせたいことがあると言われたが、それを承はらぬうちに夜が更けてしまった。聴かずともよくわかったのは世の中の移り変わり、これから日本はどうなっていくだろうかということ、今のまんまで過ぎてもよからうかということ等、もうお互いにそれをどうすることも出来ぬほどに、時の波濤の兩岸を打つ響きが高かったのである。私たちは歎息して永く訣れた。



を打つ響きが高かったのである。私たちは歎息して永く訣れた。

一 『津具村の古文書Ⅵ』

参考文献 (日知録安政年間) 津具村教育委員会 『山崎珉平昔談』

一 佐々木克子・山崎讓一

一 『ささやかなる昔』 柳田國男 (奥三河郷土館学芸員 渡邊俊也)